

ないことゝ思はれる、さうして書體の上からすれば晚唐時代の筆と見ることは、多くの人の認めるところであらうと思ふ。然るにその二行目に「唐太宗貞觀九年」云々とあり、ついで「後召^シ本教大德僧景淨^ヲ、得^{タリ}己上卅部^ヲ」卷餘大數、具^{トモニ}在^ニ貝皮夾^ニ、猶未^{ダ、ズ}翻譯^セ」と記してある。佐伯博士^⑩はこれについて、唐太宗云々の書き方は「國朝とも記し、又は大唐とも稱することの必要なき時代になつた後世の作にして、景淨の時代から百二三十年を經過したる時代のものとしか思はれない」と説かれた。百二三十年といふ數を如何にして考へられたか知らないけれども、この年數を經過した時といへば、恐らく五代の初期を意味されたものであらう。また博士は「後召^シ本教大德僧景淨^ヲ」は、文の上よりすれば、太宗が召したことゝなるが、かゝることは有り得ず、此の跋はかゝる錯誤に氣附かざりし程の後世の作と斷定せざるを得ないといひ、且つ景淨の書いたものでないことを力説してゐられる。景淨がこの跋を書いたものでないことは言ふまでもないことで、さうであればこそ本教の大德僧景淨を召し云々とも書いてゐるのであるが、ただこれが五代の頃までも下るものか否かについては、容易に斷定し難いと思はれる。唐朝に書かれたものならば、「唐太宗皇帝」云々と書く筈がないとは尤ものことであり、かゝる類例は從來佛教關係の記事の時代を定める上に於ても、屢々取り上げられた問題であるが、この見方は必ずしも絶對的の證據とはなし得ないであらう。五代梁代の頃と見ようとするならば、經目中に、報信法王經の如く、「信」字を避けてゐないことなども注意しなければなるまい。兎も角尊經に列舉した卅五部の經典の一つである宣元至本經が、有名な景淨の譯に係ることは、獨りこの跋文によつてのみ示されることで、他に何等の證據のあることではなく、さうしてこれを肯定しようとするれば、上述のやうに、景淨は九十四五の頃、なほ唐にあつて翻譯事業に従事してゐたことを認めねばな